

「自分も みんなも 明るく うれしく よかったね」を具現する子どもの育成

～新聞を活用した、当事者意識を育む同和教育関連授業の充実と、

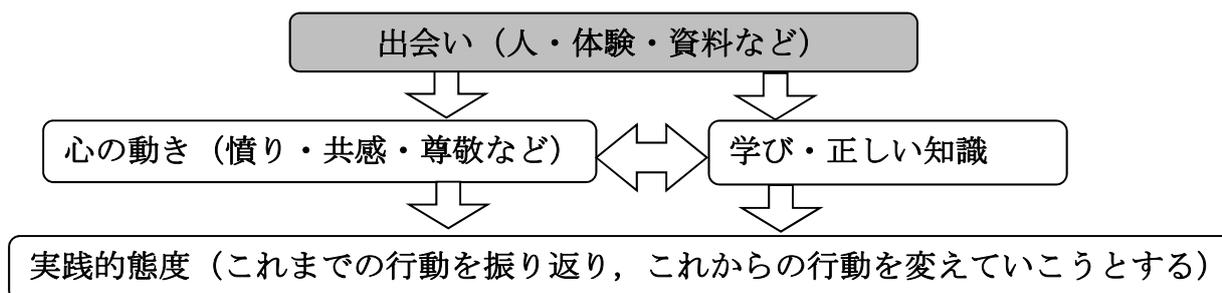
日々の教育実践の積み重ねを通して～

妙高市立新井中央小学校

1 NIE 実践のねらい

「自分も みんなも 明るく うれしく よかったね」の合言葉のもと、様々な差別などの問題を自分のこととして受け止め、考え、かかわろうとする当事者意識を育てることを大切にしている。そのため、「なかま」の時間と呼ぶ同和教育関連授業や自他を大切に行動する子どもを育てる日々の教育活動を積み重ねてきた。

当事者意識を育み、思いや決意を伝え合う「なかま」の時間を充実させるために、下図のような授業展開を基本としている。



児童は、人・体験・資料との出会いをきっかけに様々な差別などの問題について考える。差別によってつらい思いをしている人の気持ちに共感したり、差別に憤ったりする中で、正しい知識や判断力を養う。それらを総動員して、自分のこれまでの行動を振り返り、これからの行動を変えていこうとする実践的態度を育成する。そのため、本校の校内研修では、指導案に「当事者意識を高めるために」という項目を立て、授業の柱として大切にしている。

人権教育、同和教育を教育活動の中核に据えた当初、部落差別問題の学習がなかなか児童にとって現実味を帯びないという課題があり、ゲストティーチャーから直接話を聞くなど、出会わせ方や内容を工夫してきた。加えて、令和元年度からNIEの研究指定を受け、差別は今もあり、解決にはみんなが学ぶ必要があることを児童により実感させる手掛かりを新聞に求めることにした。昨年度は、「掲載内容＝事実」「様子が鮮明に伝わる写真」「人を引き付ける見出し」などの新聞の特性を活かし、課題の克服に努めた。また、中心教材としての使用、気付きや視野の広がりをねらいとした使用など、様々な活用の仕方があると分かった。

今年度は、新聞活用のさらなる可能性を見出すために、児童や職員が新聞を身近に感じる工夫を講じた。児童が関心を示すためには、まず職員が積極的に新聞を手に取り、授業に取り入れることが不可欠であると考えた。

2 本年度の実践の概要および実践例

(1) 職員のモチベーションを高める研修

① 職員自ら活字のよさを知る ～新潟日報社出前授業～

新聞のよさと新聞についての講話の後、新聞を使った演習をいくつかご紹介いただき、実際に体験した。必要な情報を探しながら新聞を斜め読みしていく作業は、当校の児童が苦手とする「長文を読み、必要な情報を見付ける」力や「長文に根気強く向き合う」育成にもつながるのではないかと。新聞のよさを知る専門家の知識と熱意に圧倒された。



② 次につながる情報収集 ～新聞活用情報交換会～

学校全体で取り組む意識を高めるために、「新聞活用情報交換会」を設定した。



1回目は、学年部で班編成し、2学期以降すぐに使える情報収集の場とした。2回目は、異学年部で編成し、発達段階に応じた新聞活用の在り方を考える場とした。億劫がらずにまず新聞を使う。使った者にしかそのよさや可能性は分からない。

③ 児童と共に学ぶ ～新潟日報記者 坂井有洋さんとのかかわり～

毎年行う人権教育、同和教育を学ぶ会の講演会に、新潟日報の記事である「素顔～新潟水俣病被害者の暮らしから～」を立ち上げた新潟日報社の記者 坂井有洋さんをお招きした。新潟水俣病を学習中の5年生と、学習してからちょうど1年経過した6年生、そして職員でお聞きした。

坂井さんは、「もっと早く知っておけば、もっと（被害者の方の）力になれたかもしれない。」と言っていました。私たちは早く知れたので、この先たくさんの人に伝えられればいいなと思います。

坂井さんはすごい。何度も被害者の方から取材を断られ、「帰れ！」とまで言われたのに、何回も訪ね、話を聞き、連載「素顔」というコーナーをつくったからです。私なら諦めてしまいそうです。坂井さんは、新聞でみんなにももちろん伝えたいし、自分でもすごく知りたいんだと思いました。



水俣病のつらさを分かってくれる人が一人でもいれば、少しはつらさがやわらいだかもしれないのに、一人もいないのは一人で抱え込んでいることになりま。抱え込むのはすごくつらいです。

坂井さんがこのコーナーをすることで何かが変わると思うけれど、そこから「みんな」が変わらないと、差別・偏見はなくならないと思いました。本当のことを知っている私たちが変わらないといけないと思いました。でも、「思いました。思いました。」と言っているだけじゃ何も変わりません。まずは、家族にこのことを話したり、みんなで意見を交流する時に自分から進んで発言したりすることが、第一歩だと感じました。

新潟水俣病であることを知られることへの不安や恐怖を知った児童は、差別のしんどさをより実感をもって理解した。坂井さんの生き方を知った児童は、自分の生き方にどう活かせるか考え、実行しようとする意欲を高めた。

④ 環境整備

昨年度は各階に分けておいていた新聞を、今年度は全校児童が毎日通る場所に一括して置き、児童が新聞を目にしやすい環境づくりを心掛けた。

また、高学年の階には、人権教育や同和教育に関する記事や児童の関心のありそうな記事の特設コーナーをつくった。



(2) 「なかま」の時間での新聞の活用

【新聞の投書から価値ある学習課題を設定する実践（1年）】

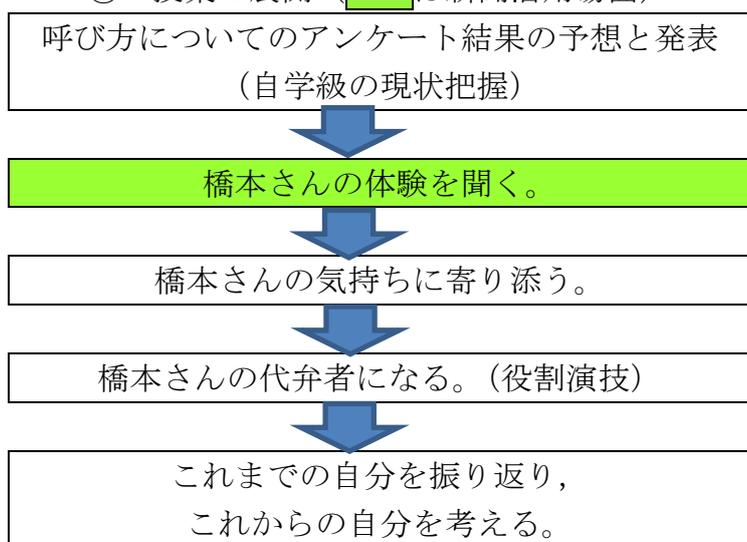
① 主題名 大切な なまえ 大切な わたし

資料名 「声〜ルールで避けられた 嫌な呼び方〜」(朝日新聞 2020年8月19日)

② 学習のねらい

あだ名で呼ばれて傷つく橋本さんの気持ちと呼び方についての橋本さんの思いを考えることを通して、名前をお互いに大切に呼び合おうという気持ちを高める。

③ 授業の展開 (は新聞活用場面)



「さん」をつけて呼ぶ理由
は何か、それを知るためにこ
んな記事があったよ！

④ 当事者意識を高めるために

・嫌な呼び方についてのアンケート結果を振り返る

事前にアンケートを実施し、学習の導入に結果を提示する。呼び方で嫌な思いをしている児童が学級に一定数いることに気付かせ、今解決しなくてはならないこととして捉えられるようにする。

・新聞記事を活用し、名前を大切にしたい気持ちと叫ばれる人の思いを知る

小学校入学時の「名字に『さん』をつけて呼ぶ」というルールに賛成する橋本さんの思いを考えると通して、名前大切に気付かせ、相手のことを大切に呼べるようにする。

⑤ 新聞の効果

・考える価値のある学習課題であることが証明された。橋本さんのように「さん」をつけることの意味を考えている人が、自分たちに以外にもいることが、児童の学習意欲につながった。

・教師への戒めとなった。筆者は、17歳になっても幼稚園での出来事を覚えている。「親や先生すら気持ちを分かってくれない」「伝える技術もなく」とある。声なき声を聞くことは、我々教職に就く者の責務である(協議会指導者の発言)。

【新聞記事から行動化を促す実践（4年）】

- ① 主題名 「自分らしさ」「その人らしさ」を大切にしよう
資料名「人生案内」（読売新聞 2020年5月29日）

② 学習のねらい

男らしさや女らしさについて考え、話し合うことを通して、自分の男女意識の傾向に気付き、男らしさや女らしさにとらわれることなく、自分らしさやその人らしさを大切にしていこうとする態度を養う。

③ 授業の展開

保育士は「男」「女」「どちらでもない」等自分の基準でどれかに分類する。

作業結果をグループで見せ合う。
(他者との比較による自分のジェンダー観の認知)

「女らしさ」に悩む人がいることを知る。

悩みに自分なりの助言をする。

これまでの自分を振り返り、
これからの自分を考える。

自分らしく生きることが
大事。人が何を言っても
関係ないよ。



④ 当事者意識を高めるために

- ・「自分はどうか考えるか」から始める

自分の意識を問う、自分の考えと友達の見解を比べるなど、自分の立ち位置を確認することから学習をスタートさせる。

- ・他教科との関連を図る

総合的な学習の時間及び国語の「わたしの夢発表」や保健体育の「体の発育・発達」「思春期の体の変化」など、今まさに進行中の学習との相乗効果をねらう。

- ・行動化を促す体験を取り入れる

新聞の投稿コーナーで「女らしさ」について悩んでいる人への助言を考え、友達と考えを交流させることを通して、児童の行動化を促す。

⑤ 授業での効果

- ・自分が悩みの助言者になることで、自分事としてとらえやすくなった。「自分だったらどう助言するか」と真剣に考えられていた。
- ・悩みの内容にとっても切実感があり、様々な方向から精一杯の助言をしていた。
- ・新聞を読むことが、様々な視点から差別や性差などについて考える機会となる。

【新聞を通し人と出会い対話する実践（5年）】

- ① 主題名 新潟水俣病への差別をなくすために行動する

資料名「素顔～新潟水俣病被害者の暮らし～」(新潟日報 2019年8月12日)

- ② 学習のねらい

新潟水俣病の被害者が体と心の痛みを耐えながら、前向きに生きる姿に共感することを通して、発生から55年過ぎた現在でも、根強く残っている差別や偏見に憤り、自分には何ができて、何をすべきなのかを考えて、差別や偏見の解決に向けて自ら行動しようとする意欲を高める。

- ③ 授業の展開

阿賀野川に向かって祈る水沢さんの写真を見て、何を祈っているのか想像し、寄り添う。

新聞を読み、なぜ今も水俣病への偏見や差別が続いているのか考える。グループ→全体

水沢さんからの手紙を聞き、これまでの自分を振り返り、これからの自分を考える。



新潟水俣病がなくなりますように…って祈っているんじゃないかな？

- ④ 当事者意識を高めるために

- ・新潟水俣病は普通に生活している人に起こった病気であることを押さえる
食料の汚染から起きた＝自分にも関係のあることだという意識をもたせる。
- ・新聞記事で水俣病被害者の現状や生き方を身近に感じ、差別の現実を直視する
水沢さんのこれまでの生き方や思いを知り、より共感させる。
- ・水沢さんから児童へ宛てたメッセージを伝える
水沢さんからのメッセージにより、児童と被害者の距離を縮める。

- ⑤ 授業での効果

- ・記事を活用することで、水俣病が現在進行中の問題であると感じることができた。
- ・連載記事で一人の人間の人生にふれることで、考え、得るものが多くなる。
- ・これぞと思った写真が使われている＝新聞記者を通して水沢さんの願いが伝わる。

3 終わりに

本年度の実践では、どれも新聞を介してつながった人の思いに応えようとする児童意識の高まりが見られた。このコロナ禍で、新聞は人と人をつなぎ、学びを深める媒体の一つであると実感する取組となった。欲を言えば、「こんな記事を書いてほしい」という学校現場からの要請にいただければ、見通しをもった活動が構想でき、更に教育活動が充実するであろう。(松本 紀子)